

VIVA MEXICO



魚沼市立須原小学校
角 直浩

「V I V A M E X I C O」は
平成22年度 須原小学校4年生の学級通信に載せてきたコラムです。

VIVA MEXICO・・・(43) 世界人

メキシコへ赴任すると決まるまで、メキシコという国に対して何の知識もなく興味もなく、私にとっては、ただアメリカの南にある細くなっているところ、というだけの国だった。事前の研修では、治安は悪いだの、必ず下痢をするだの、いい話はひとつもなし。

しかし、メキシコでの4年間。この国の人たちとのさまざまな交流を通してメキシコという国が、私の心の中にどんどんと広がってきた。確かに、文化の違い、考え方の違い、生活感の違いなどから「ついていけない」と憤りを感じることもあった。でもそれは、日本人である自分を基準に考えている、いわば狭い感覚から来るものだった。

メキシコ人の先生の話が印象に残っている。先生は円形の厚紙を提示して、「何色に見えますか」と質問された。こちらから見ている私には紫色の円が見えている。当然「紫色」と答える。しかし、先生は「黄色ですよ」と言うのだ。実は、その円の先生側は黄色になっていた。「同じものを見ているつもりでも、見方によって違うように見えてしまいます。同じものを見ようとするならば、同じ側に立って見てみましょう。」外国を知ろうとする上で、日本人の感覚で見たり感じたりするのではなく、相手の国の感覚で物事をみるのが大切だ、と理解した。

国際感覚。国際理解。この地球に住む世界人である私たちにとって、大切なものだと思う。(終)



VIVA MEXICO・・・(41) ハカランダ

メキシコシティではこの時期、気温がどんどん上昇する。日中は25度以上となり、半袖で十分な気候となる。乾季のまっただ中であり、空気が1年の中で一番悪い。光化学スモッグによる外出制限が行われることが何度かあるほどだ。

そんな季節、メキシコシティを彩るのがハカランダの花である。「世界三大花木」のひとつとされているそうだが、日本の桜のように、木全体に花が咲く。色は青紫。鮮やかな青紫色の花は、メキシコの空に映える。そして、風が吹くとひらひらと散り、木の下には紫色のじゅうたんが敷き詰められたようになる。これもまた美しい。残念ながら(?)日本のような「お花見」の文化はない。(花見は、日本独特の文化?)

また、ハカランダの木はギターの最高級素材である。ワシントン条約によって伐採や取引が禁止されているので、ハカランダを使用しているギターは希少価値がある。

そんなハカランダだが、1月ごろには多くの花粉を飛ばす。花粉症の人にはたまらない。私も、毎年1月ごろはつらい思いをしてきた。去年は、メキシコでハカランダの花粉、帰国してスギ花粉。 ああ、これからまた花粉の季節がやって来る。

VIVA MEXICO・・・(42) 責任

日本ではありえないな、と思う場面が多くあった。

路線バス。普通に乗客を乗せているバスが、普通に乗車口を開けっぱなしで走っている。客の乗り降りがスムーズだし、風通しがいい。しかし、日本でそんなことをしたら、その運転手はすぐに責任をとりバス会社を辞めなければならないだろう。

観光地。山間にある景観地として有名な「イエルベ・エル・アグア」というところがある。山肌が鍾乳石のようになっていて、岩全体が大きな滝のような景観になっている。その、滝のようになっている山肌には普通に立ち入ることができるのだが、まったく柵が設けられていない。その先は断崖絶壁。足を滑らせれば命がない、というような所だ。日本では、誰かが落ちれば、管理者の責任になり大問題となるだろう。

いずれも自己責任なのだ。不注意で落ちる人が悪い。

ちょっと違う話になるが、学校でリコーダー等の販売をお願いし、その業者が来るのを待っていたのだが、大幅に遅刻してきた。「時間が過ぎていますが」と言うと、「時間通りに到着するように出たが、渋滞に巻き込まれた。時間通りに出た私は悪くなく、渋滞が悪いのだ。」という返答。渋滞の責任なのだ。責任の所在、日本と大きく違う。



VIVA MEXICO・・・(39) エンターテイメント

メキシコの代表的なスポーツは「ルチャリブレ」だ。プロレスのような競技だが、プロレスとは一味違う。1対1の試合もあれば、3人对3人など、人数が多い試合もある。一定のルールはあるが、あとは自由に戦っている、という感じである。友人と一緒に何度も試合を観に行ったが、なかなかおもしろい。

ルチャリブレの特徴としてははっきりしているのは、必ず善玉対悪玉の試合なのだ。人気者の選手には歓声があき、ヒール役の選手にはブーイングが浴びせられる。そして、一番面白いのは、試合でありながら、ストーリーが決まっているところだ。最初の方は、悪玉優勢で試合が進み、あるきっかけで形勢逆転。そして、善玉が最後は勝つのだ。筋書き通り。それがわかっているから、おもしろいし、期待を裏切らない。(たまに、悪玉が勝つ試合もあるが、それもまた会場は盛り上がる。筋書き通り。)

選手たちの動きは素早く空中戦もすごい。さすがプロの技だと感心する。だから、試合自体は、飽きが来ない。どっちが勝つかわかっていてもわくわくドキドキなのだ。メキシコでは国技ともいわれるルチャリブレ。最高のエンターテイメントだ。

VIVA MEXICO・・・(40) サイン

日本では、公式な文書などに署名し印鑑を押す。ハンコの文化が根付いている。学校でもいろいろな文書にハンコが押される。保護者の印の欄にハンコが押されていることで、家庭でチェックされたという証となる。(子どもが勝手に押印している?)

メキシコでは、ハンコの文化が無いので、サインが重要な証となる。メキシコの人たちのサインは、とても上手というか、工夫されているというか。とにかく、カッコいい。単に名前を筆記体で書くのではなく、誰にも真似されないように工夫されている。インクが出なくなったボールペンをグルグルと紙に書いてインクが出るのを待つような感じのサイン、ともいえばいいのか・・・。(表現がへたくそだが、決してグチャグチャなのではない。)

それにしても、いつ頃から自分のサインが書けるようになるのだろうか。責任ある大人になるための準備のひとつとなるはずだ。そのためにたくさん練習もするのだろう。カッコいいサイン。私も書けるようになりたいなと思いながら、結局4年間がすぎ去って行った。日本は「ハンコの国」でよかった・・・?!。



VIVA MEXICO・・・(37) 薬

長男が皮膚科に行くことになった。赴任した1年目の夏。メキシコで初めての通院である。(メキシコにも日本語の通じる医者も多くいて、この点において困ることはほとんどない。)長男の様子を診てもらい、薬局で薬を購入した。飲み薬と塗り薬。さっそくその日から薬を服用することになった。それが、なんとみるみる治っていくのだ。とにかく驚くほど治るのが早い。裏を返せば、それだけ強い薬なのだろう。全体的に、メキシコの薬は、日本のものよりもきついようである。だから、メキシコで売っている薬は、できればあまり使わないようにしたいと考えていた。

しかし、メキシコでは、定期的に「虫下し」の薬を飲んだ方がよい、ということになっている。虫下し。要するに、おなかの中にいる「虫」をやっつける薬だ。メキシコで生活していると、どうやら虫をおなかの中で飼ってしまうようだ。実際にはどのような確率でそうなるのかはわからないが、周りで「(薬を) 飲んだ方がいいよ」というので、普通に薬局で市販されているものを定期的に飲んだ。メキシコから帰国する時にもやはり飲むことにした。

その後の検診で異常がないので、薬は効いたのだろう。強い薬でよかった？！

VIVA MEXICO・・・(38) 道路の案内板

日本では、どのあたりでどの程度渋滞しているかがわかるような案内板がいろいろなところに設置してある。それを見てそこを回避したり、仕方なく通らなければならない場合は覚悟を決めたりする。とても親切な案内板である。メキシコは、…残念ながらそのようなものはほとんどない。通行止めになっている場所があったとしても、その場所に行かないとわからない。3車線だった道路が、突然2車線になっているところもある。手前に、注意を促すような表示はないのだ。

遺跡へ行くために車で出かけて行くことがあった。おおまかな場所は地図で確かめて出発。有名な遺跡であれば、ある程度手前から、「あと何キロ」「ここを右折」などの案内板があるのだが、近づいてくと、なぜか案内がなくなってしまうのだ。近くに来ているのに、どこをどう行けばよいかわからなくなってしまう。ましてや、一方通行の多いメキシコ。仕方なく、たどたどしいスペイン語で道端の人に尋ねて、ようやくたどり着いた、なんてこともあった。まあ、着いてしまえば、その遺跡のすばらしさに感動し、それまでの苦労は忘れてしまうのだが。

日本の案内板、表示は、やはり親切なんだと改めて思う。



VIVA MEXICO・・・(35) 車内アナウンス

「次は〇〇 次は〇〇です。」電車やバスに乗っていると、このようなアナウンスが流れてくる。「△△医院へはこちらが便利です。」と付けくわえられる場合もある。

メキシコの公共の乗り物には、このようなアナウンスはまず無い。

(実は、バスや地下鉄など、公共の乗り物には、私たち派遣職員は乗らないように申し合せている。犯罪が多いからである。ただし、主要道路を走るメトロバスという乗り物は犯罪が少なく比較的安全であることから、昼間に限り乗ることができる。)

地下鉄や普通の路面バスを利用している人から聞いたのだが、とにかく、走っている現在地を常に把握していないと、降りたいところで降りられない。乗り過ごしてしまうのである。それに比べれば、日本の乗り物は丁寧であり親切である。ただ、ある人に聞くと、逆に、日本の車内アナウンスはうるさすぎる、という意見も聞いた。必要最低限でよいというのだ。

確かに、いろいろな場面で日本は丁寧で親切であるが、サービス過剰な部分も否めない。クレームの未然防止とも考えられる。メキシコ人が日本の乗り物に乗った時、このサービスがどのように感じられるのか、聞いてみたいところである。

VIVA MEXICO・・・(36) インフルエンザ

インフルエンザの流行期に入った。どの学校でも欠席者が増えてきているようである。季節性のインフルエンザは、メキシコでもこの時期流行する。しかし、一昨年は少し違った。

豚(新型)インフルエンザは、メキシコ湾に面するベラクルスという街で初めて感染者が確認された。(ということになっている。)またたく間に感染が拡大し世界に広がっていった。渦中のメキシコ市にいた私も、最初は目に見えないウイルスに恐怖を覚えたが、なぜか私たちの周りでは感染する人は出てこなかった。少なくとも学校の子どもたちや保護者にもいなかった。日本での報道と現地のメキシコの様子は少し違う様子だった。

実は、私の周りではその年の2月から3月くらいに、インフルエンザが流行していたのだ。報道で騒がれる数ヶ月前である。当然季節性のものと考えていたので、それほどあわてることはなかった。しかし、振り返ってみると、それが新型だったのではないか。すでに、そこで免疫ができて、その後大丈夫だったのではないかと考えている。

何はともあれ、これからも、インフルエンザウイルスには注意していかなければならない。予防のためにも、かかった時のためにも、体力をつけておく必要がある。



VIVA MEXICO・・・(33) お正月

日本では、クリスマスが終わると一気に新年を迎える準備が始まり、年が明けるとお正月の雰囲気一色となる。年賀状、おせち、初詣、門松、鏡餅・・・日本古来の文化が大いに表出する。

メキシコでは、新年を迎えて何か変化があるかという、あまりない。元日にいつもよりお店が早く終わる程度だ。デパートには福袋なんてないし、特に飾り付けをしているわけでもない。それどころか、まだクリスマスツリーが飾られている。

実はまだクリスマスシーズンが終わっていないのだ。カトリックの暦で、「三賢者の日」という祝日がある(1月6日)。キリストが生まれたことを知った3人の賢者がプレゼントをもってやってきた、という日だ。これにちなんで、この日、子どもたちはプレゼントがもらえる。サンタさんからもらい、さらに賢者からももらえるのだ。子どもたちにとっては、この時期ウハウハだろう。

日本の子どもたちにとって メキシコの子どもたちはうらやましい?! いやいや、日本にはお年玉という文化があるじゃないですか。

VIVA MEXICO・・・(34) 成人式

先日の成人の日には、各地で成人式が行われた。魚沼では5月の連休に行われるそう。須原小で最初に担任した子どもたちも20歳になった。飲酒や喫煙などが許される年齢となったわけである。

メキシコでは、結婚、飲酒、喫煙が許されるのが日本よりも少し早く、18歳となっている。ちなみに、車の運転については16歳からできる。ただし、18歳以上の運転免除保持者が助手席に同乗していることが条件となっている。

メキシコでは、日本のように、成人の日という祝日はなく、成人式のようなセレモニーもない。ただ、少し違うが、女性が15歳になった時に、盛大にお祝いをする。「キンセアニョス(15歳)」は、メキシコの女性にとって、一つの節目であり、大人の仲間入りをするという意味があるのだろう。教会で盛大なセレモニーを開き、さらに、パーティを催す。その中で、お父さんとワルツを踊るのが習慣なのだそう。この日のために、ドレスをつくったり、教会などを貸し切ったり、たくさんのお金をかける。

ちなみに、なぜか男性に対しては、このような習慣がない。



VIVA MEXICO・・・(31) フェリス ナビダ

クリスマスが近づいてきた。いろいろなお店でクリスマスを意識したディスプレイが施されていて、クリスマスの雰囲気盛り上げている。

メキシコは、カトリックの国なので、それこそ大いに盛り上がる。ちなみに、「メリークリスマス」ではなく、スペイン語で「フェリス ナビダ」という。やはり、街中どこでもクリスマスカラーで飾られる。お店だけではない。高級住宅街では、それぞれの家々が、電飾で飾られているのだ。まるで家全体がクリスマスツリーのようになる。電気代なんて全く気にしないのだろうか・・・、と庶民的に考えてしまう私。

メキシコ人はクリスマスのために1年頑張っているんだ、という話を聞いた。1年間貯めたお金を使い果たすくらい、お祭り騒ぎをするのだ。友人を呼んでホームパーティを開く。友人は、そのまた友人を呼ぶ。結局、まったく知らない人もパーティに参加していることも。それでも、メキシコ人はみんながアミーゴ（友だち）。関係なく、一晩中盛り上がるのである。（近所迷惑という言葉は存在しない。）

この時期、郵便は出してはいけない。郵便屋さん仕事よりパーティなのだ。

VIVA MEXICO・・・(32) ストリートチルドレン②

支援しているボランティアの人たちと一緒に、メキシコシティの中心部を回ったことがある。ストリートチルドレンの現状を把握し勉強したいと思い、お願いをして実現した。ボランティアの人たちは、どの子がどの辺で生活をしているか、ということをお願いしている。

まずは、地下鉄の駅で最初の子どもに会った。背格好から中学生くらいだと思う。駅の地下道で寝泊りをしているという。やせていて弱々しく感じられたが、ボランティアの人が声をかけるとニコッと笑った。その笑顔は、その身なりに合わず、明るくあたたかかった。

地下鉄の駅から出て、大きな通りを歩いて行くと、交差点に数人の子どもたちがいた。高校生くらいだ。交差点に停まった車の窓ふきをしている子は、朝からの稼ぎだろうか、ポケットから小銭をひとつかみ見せてくれた。自慢げだった。別の子は、ティッシュになにやら湿らせて、鼻に近づけている。なんとシンナーである。それだけでも驚いたのに、なんと、そのシンナーを買いに来た人がいたのだ。車に乗ってきた普通の大人である。小銭を渡し、車で立ち去った。ボランティアの人に「これって普通ですか？」と思わず聞いてしまった。日常だそう。

よく、路上で生活をしている子どもたちに、お金や服、物品を渡す人がいるそうだ。確かに、温かい気持ちから手を差し伸べたくなる。しかし、ボランティアの人たちは、それを否定する。

「路上で生活をしていても、お金も服も手に入るようでは、その生活から脱却させることはできない。その方が楽だからです。自立を促し、就職できるようにすることが大事なのであって、私たちはその手伝いをしたいと思っています。」

ボランティアの人数は路上生活をする子どもたちの人数からすると、とてつもなく少ない。現状を改善していくことは不可能に近いように感じてしまう。しかし、ボランティアの人たちは、小さな積み重ねを信じ、子どもたちに声をかけていく。



VIVA MEXICO・・・(29) 停電

メキシコでは、頻繁に停電する。原因はよくわからないが、電力供給の不安定な面もあるし、落雷や暴風などが原因になることもある。

電気が無いと生活する上で困ることはたくさんある。例えばこんなことがあった。夜、寝ている間に停電してしまい、予約を入れていた炊飯器が、朝そのままの状態だった。メキシコでは給食が無いので、毎日弁当を作るのが妻の仕事だったが、それができない。(こんな日は、学校にあるカフェテリアで食事を買うことになる。)

朝から停電で困ったこともあった。学校に来たら、職員室が暗い。レンガ造りの校舎は、ただでさえ窓が少ないので、停電となると昼間でも室内は暗いのである。仕事道具となるパソコンもダメ、コピー機も印刷機もダメ。おまけに、水道が出ない。水を供給しているモーターが動かないのだ。一番困るのはトイレである。電気会社に復旧のめどを聞くのだが、聞くだけ無駄である。「メキシコだからだ。」仕方なく、子どもたちは午前で早帰りにした。

めったに停電しない日本は、あたりまえのようで、やっぱりすごいと思う。

VIVA MEXICO・・・(30) ストリートチルドレン

車を運転していて、信号で停車すると、中高生くらいの子どもがフロントガラスを拭いてきれいにしようと寄ってくる。ジュースのペットボトルに少量の洗剤を水で薄めたものと、スポンジ、そして水切り用のゴムへらを持って。信号が青に変わるまでの短い時間に、手際良くフロントガラスをきれいにしてくれる。きれいにしてもらったら、そのお礼にプロピーナ(チップ)をわたす。1~2ペソ(約10円)程度である。彼らは、こうやって、食べるためのお金を稼いでいるのである。

フロントガラス拭きの他に、同じように信号のところでお菓子を売る、あるいは、簡単なパフォーマンスをして、チップをもらう。

ストリートチルドレン=路上に住む子どもたち。メキシコを中心部に、全国各地から、「親から逃げて」集まってくる。家庭が貧しくて食べさせてもらえない、虐待、性的暴力など、原因は様々だが、それだけ国民の貧富の差が大きいということである。

支援しているボランティアの人たちは、定期的に子どもたちの様子を見て回っている。「今日もあの子が生きていてよかった。」という言葉がとても重く感じられた。



VIVA MEXICO・・・(27) 防犯意識

「日本はやっぱり安全な国なんだなぁ」と思う反面、「これでいいのかな」とも時々思う。

というのは、例えばファーストフードのお店に入ったときである。座席を確保するために、カウンターに並ぶ前に、上着などを座席に置いている人を見かける。時には、カバンを置いている人もいる。それを見て、「大丈夫なんだろうか。」とってしまう。メキシコでは、あり得ない光景なのだ。「持っていてもいいよ」状態。おそらく、メキシコで同じようなことをすれば、高い確率で無くなってしまいうだろう。怖いのは、店員が犯人になることも十分考えられるのだ。実際、同僚がレストランで食事をしていたときに、いすの背もたれにカバンをかけていた。店を出た時には、携帯電話が無くなっていて。店員にすられたのである。

コンビニで、車のエンジンをかけたまま、買い物をしている人もよく見かける。これも、メキシコでは絶対にNGである。

日本は安全だ、という神話は崩れてきたという昨今の状況であるが、それでも、防犯意識は高くなってきたと言えない。という私も、少しずつ緩んできてしまっている。

VIVA MEXICO・・・(28) 道の名前

メキシコ革命が勃発してから今年でちょうど100年。革命記念日は11月20日。この日は、数少ないメキシコの祝日のひとつとなっている。

さて、メキシコシティの道(通り)は、すべてに名前が付いている。住所も、家が面している道の名前が使われているので、家を探すのも何かと便利である。高速道路は、日本のように○号線というように数字で表しているが、その他の道は、とにかくいろいろな名前が付いている。

例えば、メキシコの歴代大統領や歴史上の人物の名前。各地にある山の名前。あるいは、川の名前。面白いのは、世界の都市の名前などもある。TOKYO という通りの名前もあった。(残念ながらNIIGATAは無かったが・・・)

メキシコの記念日そのものも通りの名前になっている。革命記念日にちなんだ「11月20日通り」という道もある。メキシコの中心部へ通じる重要な道である。

私の誕生日が通りの名前になっている！

何度か車を走らせ、さらに、その通りの名前が書いてある表示板をカメラに収めた。



VIVA MEXICO・・・(25) クラクション

車のクラクションを鳴らすことはあるだろうか。まあ、少しは鳴らすこともあるだろうが、そんなに頻繁にはないだろう。私はほとんど鳴らすことがない。

メキシコで運転をしていると、とにかくたくさん車のクラクションの音が耳に入ってくる。それぞれの運転が荒いこともあるが、それだけではなく、必要以上に鳴らしているように思う。

例えば、信号待ちをしているとする。もうすぐ青に変わるという時に、(まだ青になっていないのに)後ろの車が「プー」と鳴らすのだ。最初のうちは、何か悪いことをしたかな、と考えていたが、どうも、「信号が青に変わったらすぐに動け」というサインのようだ、と後から気がついた。

渋滞で少しも車が前に進まない時は、だれかが鳴らすと、みんなが続いて鳴らし出す。いくらクラクションを鳴らしても、渋滞が解消するわけではないのに。イライラしているからなのだろうが、意味が無い、と私は思う。いやいや、メキシコの人たちにとっては、意味のあることなのかもしれない。文化の違い・・・なのか？！

VIVA MEXICO・・・(26) 太閤様

メキシコシティから70kmほど離れたところにクエルナバカという街がある。標高はメキシコシティより1000mほど低く、年中温暖な気候なので、とても暮らしやすい所である。「常春の街」とも言われている。メキシコシティからも近く、お金持ちの方々の別荘が多く建ち並んでいるところでもある。かつて、アステカ帝国を滅ぼしたエルナンコルテスも、シティではなく、このクエルナバカに住んでいたという。

さて、その街の中心にある大きなカテドラル(教会)の内壁に、ある壁画が描かれている。26人の宣教師たちが、長崎で十字架にはりつけられている様子である。1597年、秀吉の命令でキリシタンたちが処刑された事件。その処刑された宣教師の中に1人のメキシコ人が含まれていたのだ。名前は、フェリペ・デ・ヘスス。

壁画のところには、文字も書かれている。「EMPERADOR TAYCOSAMA・・・」エンペラドール タイコウサマ。太閤秀吉のことである。

誰がどのタイミングで描いたのかは不明だが、日本から何千キロも離れたこの地で、数百年も前にあった事件のことを伝える壁画を、異国の地メキシコで観た時は、なぜだか鳥肌が立ってしまったことを覚えている。

